

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

チャールズ・テイラー政治哲学の形成
(1956-1970年)

氏 名

梅川 佳子

論 文 内 容 の 要 旨

(1) 本論文の問いとテイラー

市民は政治に対して、どのような関係を結ぶべきか。この問いは政治学において重要な問題の1つをなしている。本論文は、この問いに答えるための基礎作業のひとつとして、テイラー政治哲学の形成過程を解明する。

冒頭の問いに対して、例えばロバート・ノージックの最小国家論によると、市民は、もっぱら市場で活動する主体であり、国家に対しては最小の関係を結ぶ。これに対してジョン・ロールズにおいては、市民は、社会の「基本構造」を生み出すための「必要最小限」の道徳的能力を持っており、これによって公正な社会を生み出す。このときの道徳的能力は、各人の多様な道徳能力のうち、その基礎にある共通部分である。共通部分を超える善の追求は各人の自由の領域に残される。

マイケル・サンデルはこれを批判し、諸個人は、共同して、善き生を探求しなければならないと言う。市民の政治参加とは、各人の善の追求と公的な政治の結合である。しかし、それは、どのようにして可能になるのか。この問題にとりくんできたのがチ

ャールズ・テイラーであり、この理由から本論文はテイラーを取り上げる。

(2) 本論文の主張

本論文は、テイラーの政治哲学が、下記の2点を追究したと主張する。

第1 「個人論」

(a)個人を自律した主体として理解すること (第3・4・5章)。

(b)個人がラージャー・ライフを通じて政治共同体と接続すること (第4・5章)。

第2 「疎外論」

(a)現代資本主義での疎外克服 (第2・4・5章)。

(b)スターリニズム下での疎外克服 (第1・2章)。

上の内容のうち第1(a)の個人論であるが、テイラーは個人の自律を前提とする。第1(b)では、個人は、アイデンティティを構成するために崇高な価値を追求するラージャー・ライフを媒介として、政治共同体と接続する。この接続を可能にするためには、相互に違う価値観を持つ諸個人の間で対話を行うことを可能にする対話社会を実現しなければならないという。

第2(a)であるが、上のラージャー・ライフのためには、資本主義社会における諸個人の疎外の克服が不可欠であり、労働疎外のみならず、社会的、宗教的、政治的疎外の克服が必要だという。これらを克服して、人間的なニーズが優先する社会をつくらなければならない。そのためには、労働者をはじめとする人々の連帯が必要である。テイラーは、このような疎外克服と連帯によって構成されるのが、自己のソーシャリ

ズムであると呼んでいる。

第2(b)では、当時の社会主義圏の疎外として、スターリニズムが厳しく批判されるが、テイラーは、スターリニズムの原因の1つは Kommunismus にもあったとして、Kommunismus を拒否している。

本論文は、1956年から1970年までのテイラーの政治哲学は上の2点によって構成されていたと主張するものである。

(3) 本論文の構成

本論文の構成は、上の主張の論理的順序とは違っており、時間的に早いものから順に論じる。それは本論文が扱うのが青年期なので、最初に理論があつて、これを展開するわけではないところに、理由がある。テイラーは、最初は政治活動に熱心であり、種々の論文を書くが、まとまりのあるものではない。しかし、この間にテイラーは成長して、1964年に『行動の説明』を出版し、1970年に『政治の形態』を出版する。いずれの本においても、これだけを扱うと、それを生み出してきた過程が、この本に与えている意味が見えにくい。例えば青年期最後の著作である『政治の形態』だけを扱うと、彼が、実はマルクスを經由していること、あるいは激しい人道主義を持っていることは見えてこない。

そこで、本論文は、青年期の初期から、おおむね時間的な経過を追って述べており、彼の成長を、筆者も吸収しながら、青年期最後の時期の出版である『政治の形態』を論じる。したがって、第1章から第5章の順序は、本論文の主張の論点の順序でいえば、おおむね、2(b)⇒2(a)⇒1(a)⇒1(b)という順序になる。

①第1章

本章で扱うのは、前に述べた本論文の主張の第2(b)「スターリニズム下での疎外」である。テイラーは、ハンガリー難民が、スターリニズムによる究極の疎外と理解した。テイラー25歳のときの人道的活動である。

②第2章

本章の位置は、前の本論文の主張のうち、第2「疎外論」の(a)と(b)の一部にあたる。1957年から1960年までのニューレフト時代の理論活動を見る。テイラーの疎外論とそれを克服しようとする彼独特のソシャリズムの理念は、このニューレフト時代につくられる。特に(a)の資本主義における疎外克服の関心が強く、初期マルクスの『経哲草稿』を熱心に議論している。テイラーは、自己の思想をソシャリズムと呼んでいるが、従来の共産党の革命による社会主義社会の方向とは、全く異なり、民主主義の拡充による社会改革の方向を模索する。

③第3章

本論文における本章の位置は、第1の(a)にあたる。本章の目的は、テイラーが個人を自律した主体としてとらえたことを示すことである。テイラーの最初の単著『行動の説明』(1964)を主な素材とする。この本には政治的な色彩はなく、当時の科学的行動論心理学に対する批判である。テイラーは、人間の行動を機械論的に、あるいはは刺激・反応の過程として説明することに反対し、行動は主体の行うものと言い、行為主体の意図などの自主的な判断を強調する。

④第4章

本章は、第1(a)(b)および第2(a)にあたる。本章ではテイラーの次のような考えを示す。第1に、個人はラジャー・ライフを追求するものであること、第2に、その個人が相互に「レシピエント・ドナー」関係をむすぶことで社会関係が創造されること、第3に、この社会関係創出に対して、宗教的疎外、社会的疎外、政治的疎外が障害となっていることである。第4に、疎外を乗り越える社会をつくるためには諸個人の「対話社会」を形成する必要があるという。テイラーのコミュニティは、何等かの確定した内容によって維持されるものではなく、異なる価値観の「対話」関係そのもののことである。

⑤第5章

本章は、第4章と同じように、第1(a)(b)および第2(a)にあたるが、この第5章では、テイラーのカナダでの具体的な政治活動を取り上げる。テイラーは、当時のカナダが大企業と関係の深い2大政党で支配されているので、第3極の立ち上げが必要であり、新民主党がその政党だという。

テイラーは、大企業が支配していた当時の資本主義社会においては、社会的富が企業に偏在していると考えた。企業は市民に対して「代表無き課税」を行い、それで得た資金を投資する際、その「優先順位」を自己本位に行っていると言う。これで社会の富が人民のニーズにそって配分されるのではなく、企業本位の配分になっている。そこで富の配分の「優先順位」を人民のニーズに適合するようにするために政府は「投資基金」を作って、投資のコントロールをするという。このように企業の自律性を拘束する介入政策がソーシャリスト・モデルと呼ばれている。

また、政府による経済介入は中央集権的な介入ではなく、地方政府と、さらに小規

模の「隣人政府」を活発に機能させ、市民の発言権を拡大するべきだという。社会で不利な立場にいる人たちの連帯運動を作り出すことによって「対話社会」の実現を目指した。

(4) 結論

①本論文が明らかにしたテイラー哲学の形成と課題

本論文は、テイラーの成長の時間的経過を追うように構成されている。第1に彼の政治活動であるが、単なる人道支援であったハンガリー難民支援活動が、ニューレフトの時代を経て、その後、自ら新民主党の副党首として、責任ある立場で政治活動を行う。これは政治活動の面での成長であろう。

第2に個人論であるが、『行動の説明』では、個人は自律した主体であることを強調するだけだったが、その後の『政治の形態』では、個人がラジャー・ライフを追求し、これを通じて、政治共同体に接続することを期待するようになる。

第3に疎外論からソーシャリズムへの成長である。難民支援の時代には、スターリニズム批判でしかなかったものが、ニューレフト時代になると、初期マルクスの影響もあり、「疎外」の問題を考えるようになる。その中で、彼の「ソーシャリズム」も形成されてくる。

しかし第4に、テイラーの哲学は課題も残している。まず、テイラーが個人は主体性を持っていると判断した根拠は「日常概念」であるとしたが、この意味はその後のテイラーの研究で深められると思われるが、この点の探求は、筆者の課題として残っている。さらに、ラジャー・ライフの内容についても、その後の研究で展開されるので、その内容を研究する必要がある。

②政治思想研究に対する本論文の貢献

これまでのテイラー政治哲学の研究の特徴は下記の3点に整理できる。

第1に、テイラーをコミュニタリアン、あるいはそれに近いとみる研究と、個人主義と見る研究への分化である。

第2に、青年期のテイラー研究が希薄なことである。

第3に、テイラーの政治家としての面の考察が弱いことである。

第1に、テイラーの個人主義とコミュニタリアンの関係であるが、テイラーにおいては何等かの内容を固定したコミュニティではなく、価値に関する対話としてのコミュニティを構想しており、その意味で個人主義を基盤としており、個人を抑圧する構造ではない。本論文は、この点を明らかにした。

第2に、本論文は、青年期のテイラーを考察することで、彼の個人主義が、自由主義的個人主義と異なり、疎外克服を大きな課題とするものであり、テイラーの用語ではソーシャリズムであることを明らかにした。これは従来の研究ではあまり論じられておらず、テイラー研究に新しい視点をもたらす。

第3に、テイラーの政治的実践活動を検討することによって、彼の資本主義に対する批判的な態度を引き出した。これも、テイラーの著作を読みなおす必要性を示している。

③政治学に対する本論文の意義

本論文の冒頭の問題は、市民は政治に対して、どのような関係を結ぶべきか、というものであった。テイラーの場合、諸個人が自分たちのアイデンティティを創り、そのさいにラージャー・ライフを追求し、その善の構想をお互いに「与え」て「受け取

り」ながら、社会正義を再構成していく過程を期待している。こうして、個人が政治から切断されることを防ぎ、政治共同体との接続をもたらそうとする。しかも、そのためには、その障害となっている政治的、社会的、宗教的、資本主義的な疎外の克服が必要だという。これは、簡単なことではないが、現代政治の再生を考えると、検討する価値のあるものではないかと思われる。

さらに「対話社会論」であるが、現代の政治に対する市民の「幻滅」を乗り越える方法として、この「対話社会」論の可能性は、ハーバーマスのコミュニケーション社会論との接合も考えながら、検討される意味もあると思われる。

さらに、このアジアにおいて、中国、韓国、日本をはじめとして諸国の間の「対話社会」を作り上げるのは喫緊の課題でもあり、この方法の検討も必要である。